

「身近な夏の不思議体験 2015 イン山科」 開催

8月9日（日）本学実習室にて、市民組織「山科区“人づくり”ネットワーク」と共に、理科実験講座「身近な夏の不思議体験 2015 イン山科」を開催した。理科の楽しさを知ってもらいたいと2011年度から始まったこの講座は今年で5回目を迎え、参加児童のリピート率が高い本学の夏の恒例行事になっている。当日は学生実習支援センター教員と企画・広報課職員のほか、約30名の地域ボランティアスタッフのサポートのもと、山科地区の児童（4～6年生）105名が午前と午後の部に分かれ、身近な科学の不思議を体験した。

今回は小学5年生で習うヨウ素デンプン反応をテーマに3種類の実験を行った。「なぜおもちのはのびるの？」ではデンプンの構造の違いを、もち米と他の米のゆで汁にヨウ素を含むうがい薬を加え、反応液の色の違いとして観察した。次に「だ液はスゴイ！」では、綿棒にだ液とデンプンを含ませ、カイロで1分温めるとヨウ素デンプン反応をしなくなることを観察し、だ液の働きを楽しく学んでもらった。特に児童の人気が高かった3番目の実験「電気ので紙に字を書いてみよう」では、ヨウ化カリウム水溶液の電気分解を利用し、デンプン水溶液を浸み込ませた紙に文字や絵を書いてもらった。紙に浮き出る鮮やかな紫色に感嘆の声が響き、「電気は目に見えないのに字が書けるなんて不思議」と自然現象の不思議と理科実験の楽しさを満喫した様子であった。実施後のアンケートでは「学校で習った理科を使って、たくさんの応用知識が増えてよかった」、「理科はあまり好きじゃなかったけれど、この体験で好きになれました」、「家でも工夫して（実験を）やりたい」等の感想が寄せられ、盛会裏にイベントを終了することができた。今後も地域に根差した大学の役割として、近隣学区の児童・生徒の理科教育の一助になればと期待し、継続していきたいと考えている。

学生実習支援センター 助教 高尾 郁子



身近な夏の不思議体験に参加してよかったですか？

